



## 背景

昭和62年(1987)10月17日午前零時頃、台風19号は高知県室戸市付近に上陸し、四国南東部を北東に進みました。この台風により、三木町はわずか2日足らずで年間雨量の半分近い471mmという記録的な豪雨に見舞われました。香川県は温暖な気候で、まさか三木町に災害はないと思っている人が多いため、一旦、水害が起きると、ひっきりなしに110番の電話が鳴り続けました。この災害を経験した警察官は、何でも警察に頼らざるを得ない状況に対して警鐘を鳴らしています。

## アクセス 災害現場付近(大宮橋(新川))

- 琴電長尾線池戸駅より北北東へ直線距離約700m
- 三木町池戸(主要地方道小蓑前田東線)
- 緯度経度 北緯34度17分05秒, 東経134度07分25秒



昭和六二年(一九八七)の台風一九号を経験した警察官の話です。

一〇月一六日一九時二〇分「暴風雨波浪洪水警報」の発表を受け、全署員を非常召集して、台風に備えました。次第に強まる風雨の中、被害の出ないことを願わずにはいられませんでした。二十一時過ぎ以後は、ひっきりなしに住民からの窮状を訴える一一〇番がかかってきました。さらに出動中の署員からの報告とあわせ、ただならぬ事態の発生を知りました。

「急に水が来てしまった。年寄りがいるんです。何とかして」

「川の堤防が切れかかっている。すぐ男の応援を」

「水が家まで入ってきた。外も水が一杯でどこも行けん。ボートを」

「橋が流され、車ごと転落したんです」

「住宅住民が避難中ですが、一名見当たらない」

普段おとなしい新川が「毒に苦しむ大蛇」のようにのたうち回り、一夜にして三木町内に大きなつめあとを残したのです。

不幸中の幸いというべきか、三木町では、一名の犠牲者も出さず、悪夢のような一夜は明けました。